

2014.10
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やま 富 薬

10号

第36巻

No.303



リンドウ *Gentiana scabra* Bge.var *buergeri* Maxim. (リンドウ科 *Gentianaceae*)

生薬 リュウタン（龍胆） 秋に掘り取り、茎葉を除き、水洗後陽乾する。

成分 苦味配糖体龍胆龍胆龍胆：gentiopicroside, swertia marin, gentianine, gentisin, gentisic acid 等。

効能 苦味健胃薬として家庭約等に配合さる。漢方では消炎解熱剤として脳炎、眼疾患、黄疸、下痢、熱性痙攣、皮膚疾患などに用いられる。



生薬 リンドウ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



龍膽の基原植物はトウリンドウ (*G. scabra*)、トウオヤマリンドウ (*G. trifora*)、トウホクリュウタン (*G. manshurica*) が局方で定められています。日本には前二種の変種リンドウとエゾリンドウ (*G. trifora* var. *japonica*) が自生しています。トウリンドウとリンドウの違いは葉縁部や脈の突起の多少で、葉を手で触るとよりざらつく感じがする方がトウリンドウです。

リンドウの特長は「良薬口に苦し」を地でいくように、全草に強い苦みがある事です。陶弘景 (456-536) は「根の形状は牛膝に似て味が甚だ苦い。それゆえに胆を以てその名とする」と述べていますが、動物の胆が苦いことは周知のことで、架空の動物であり、最強の動物でもある龍の胆は、より苦いであろうことは言うまでもないことで、あえて記するまでのことではないと思ったのでは。しかし、『開宝本草』(973-974) に「別本の注に云く葉は龍葵 (イヌホウズキ *Solanum nigrum*) のようで、味は胆のように苦いからその名がある」と述べられています。しかし、イヌホウズキは葉が全縁で先が鋭頭である以外はリンドウに似るところはなく、語源とするには理由が希薄です。

龍胆は『神農本草経』の上品に収載され、「龍膽。一名陵游。山谷に生じ。骨間の寒熱、驚癇、邪気を治し、絶傷を続ぎ、五臓を定め、蠱毒を殺す。久しく服すれば智を益し、忘れず、身を軽くし、老いに耐える」とあり、決して苦味健胃薬だけの効能で用いられていたわけではありません。むしろ江戸末期から明治にかけて、西洋医学の考え方が伝わり、西洋生薬のゲンチアナ (*G. lutea*) のように苦味健胃薬として使用されるようになりました。

属学名 *Gentiana* は古代ギリシアやローマ時代に、バルカン半島の西部に存在した王国イリュリアの最期の王Gentius (紀元前170年頃) が「大流行したペストを抑えようと山に入り、神に祈りを奉げて矢を放つたところ、その矢はリンドウを貫きました。神の啓示と考えた王は、リンドウを人々に与えると、たちどころに効き目が表れ、治癒しました。」という伝説により、王の名を採って名づけられたと言われています。恐らくヨーロッパの山地に自生するゲンチアナ (*G. lutea*) のことであろうと推測されますが、古くから薬として用いられていたことは明らかです。

日本語のリンドウは龍膽の音が訛って転訛したものと考えられています。薬としての利用は古く、下野国 (栃木県)、二荒山神社に残る伝説に、飛鳥から奈良時代に活躍した役行者 (役小角えんのおづぬ634-701) がリンドウの根を修行の間常備薬として持ち歩くことにしたことが伝えられています。後、記録に表れるのは『出雲風土記』

(733) に産物として記され、『本草和名』(918) や『和名抄』(931) に「和名衣也美久佐 (役草えやみぐさ) 一名迹加奈 (苦菜にかな)」とあり、疫病に使う草または苦い草であることが記されています。『延喜式』(905-927) の典薬寮、諸国進年雑薬には伊勢國、龍膽三斤四兩等、尾張國、常陸國、近江國、美濃國、若狭國、丹後國、美作國等より献納されていることが記されています。(村上守一 記)